

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

⑥ マスコミとのつきあい

村本 邦子

ごく最近、久し振りに TV 番組への撮影協力をした。現在では、よほど真面目に準備して制作しているもの以外は、まず断ることにしている。忙しいというものもあるが、それによって出ていくものと、入ってくるものを考慮すると、それがいちばん懸命であると学んできたからだ。今回は、虐待をテーマにする NHK の番組だったが、制作担当の方がとても熱心に勉強されており、ずいぶん前に番組作成への助言をした。最近、送られてきた番組の DVD を見る限り、言ったことを理解しようと努力して作成してくれたことが伝わってきたからだ。

当日の打ち合わせでは、関係者の理解度に濃淡はあったが、おもに性的虐待をめぐって時代の変化を痛感すると同時に、時代の変わらなさをも痛感することになった。まずは、変化の方だが、今回の番組では、

取り上げられた虐待サバイバー3人全員が性的虐待を含んでいた。以前であれば、性的虐待はタブー視され、避けられていたことだろう。3人中1人でも取り上げられたら上出来だった。時代の変わらなさの方は、「家庭内に性的虐待が存在するなんて」という今更ながらの声だ。「もう20年も前から、このことについては情報発信してきたし、NHKにも何度か撮影協力してきましたよ!」と言ったが、番組製作にあたって先輩から後輩への受け継ぎはなされていないらしい。

振り返ってみれば、マスコミとのつきあいは案外あった。積極的に宣伝したことはなかったが、何となく話題性があったのか、時々、マイナーに取り上げてもらっては、そこから関係を広げてきた（基本的に、い

つも時代を先に行きすぎて、なかなか理解してもらえないという感じを持ってきたが、今では、時代は後から連いてくると言うことにしている)。初期の頃におつきあいしてきたマスコミ関係者は、女性の生き方に関心を持つ若い女性たちと、子どもの問題に関心を持つ若い男性たちだった。同じ目線で、長い間、親しくしていたように思うが、たぶん、業界では一定の年齢を超えると管理職ポジションになるからだろう、今は多くが現場を離れ、違うことをしている。

開設当初、女たちが子連れで心理支援をする研究所を立ち上げましたよという紹介が続いた後、1992年に発行した年報2号(性的虐待の特集号)が全国各地の新聞で広く紹介され、通信物を中心にしていたFLCネットワークにつながってくれた市民や専門家たちが結構あった。これは、NPO 法人FLC安心とつながりのコミュニティづくりネットワークに引き継がれ、今なお会員でいてくれる人もある。また、この頃、力を入れていた虐待防止教育は新聞やTVで紹介され、CAP養成講座の前身となった。

この時期に発表した「女性3人に1人が性被害経験あり」という調査については、新聞やラジオで何度も報じられた。とくに、写真入りで大きく掲載されたひとつの記事については、思い出すと面白いエピソードがいくつかある。その1。この時、関西で某学会が開催されたが、人が集まらないので、一部を市民に開放して宣伝したいということで、誰か紹介して欲しいと頼まれた。親切心から紹介して、新聞紙上に学会の告知をしてもらったのだが、この記者さんが私の報告を聞きに来て、記事にしてくれた。

ところが、なんとびっくり、このことで、私は、後々、「売名行為」と非難されることになった。当時の私は、とても不愉快に思い、腹を立てていたが、年を取った今なら、日本の学会で期待される行動様式とともに理解できる。たぶん、あの頃は、理解できなくて良かったのだろう。若いうちから、いろんなことがわかりすぎると、臆病になってしまうものだ。

その2。どうやら、この時の私の顔写真は、「闘う女」のイメージだったらしい。今、思い出しても愉快で笑えるが、この写真を見た知り合いたちがひどくショックを受けた。身近な仲間たちには笑われ、若い男性たちには、「村本さん、どうしてこんなふうになってしまったの!?!」と嘆かれ、先輩女性には、「予めちゃんと良い写真を撮っておいて、それを提供しなきゃダメよ」とたしなめられた。彼女自身はフィルム1本使って自分の写真を撮り、一番映りの良いものを取材の際に使ってもらっているのだという。へえ!ところが、自分では、その写真を見ても、さほど違和感はなかったし、試しに夫や子どもたちに聞いてみたが、当たり前のように、いつもの私だと言われた。私は当時、家で闘っていたのだろうか。ちなみに、最近、外向けの写真に関する家族のコメントは老けているというもの。このギャップは、いったい何を意味するのやら!?

その3。この記事を見て、立て続けに数人のサバイバーたちが来てくれた。なかには、「この話は決して誰にも言わず、墓場まで持っていくつもりだった。でも、この記事を見て、時代は変わったんだ、今はこの問題に取り組んでくれている人たちがいる

んだ、自分だけではなかったのだと勇気づけられた。一度、会って話したいと思って来た」と言う年輩の方々がいた。この声は、きっと氷山の一角だろう。直接、反応を知ることができなくても、報じられることで、隠れた被害者たちに密かな応援のメッセージを送ることができるのだというのは大きな発見だった。これは、パワフルなコミュニティ介入のひとつだと思う。もちろん、逆効果もしかり。

その 4。後に弁護団に加わることになる『蘇る魂』（高文研）の穂積純さんもその 1 人だった。ちょうど、弁護団に臨床心理士が必要だから探すようにと言われて探していた時、彼女はこの記事を見た。とくに写真を見て、「この人なら信頼できるかもしれない」と、思い切ってコンタクトする決意を固めたようだ。何がどんなふう to 作用するかわからない。いずれにしても、この記事がなかったらこの出会いはなかったということがある。それは単なる偶然ではなく、ある程度まで報道の設定によるので、最初にした「出ていくものと入ってくるもの」のバランスを予測して選択する方が良いと思う。

その 5。最後のエピソードは、この記事に限らないが、マスコミは一見、科学的に見えるデータに弱いという話だ。この時のデータは、若い女性の性行動に関する調査に付加したスチューデント・サンプルの単純な数値にすぎなかったが、「3 人に 1 人」となるとマスコミは飛びついてくる。それは驚きでもあり、怖ろしくもあった。私は、これを「数字のマジック」と呼んでいる。学生時代、私は統計が大嫌いだった。当時は、臨床心理学の研究法は統計というのが

お決まりで、誰も統計など信じていないのに、あたかもそれが世渡り術のように語られることに強く反発していた（これも、年を取った今となつては、日本における臨床心理学の歴史とともに、了解可能である）。この時初めて、統計調査は、社会啓発の手段として、とても有効なものなのだと知った。後に、社会学者の石川義之先生と本邦初のランダム・サンプリングによる大規模な性被害調査をすることになったのも、この学びゆえである。そして、この調査を通じて、私は、コミュニティ支援という重要なテーマに行き着くことになる。

それから、子育てや家族関係についての雑誌記事。夫婦関係では「セックスレスカップル」が話題になっていた。あの頃は、妻の側が理由のセックスレスが話題だったが、最近では、夫の側が理由のセックスレスの方が耳に入ってくる。ちなみに、日本家族計画協会の調査によれば、セックスレスカップルは増加する一方、2010 年には 4 割を越えたというから驚きだ。もはや話題に上らないほど普通のことなのかもしれない。そして、父娘関係と母娘関係。多くのライターや編集者と関わったが、ここには、とても優秀な人たち（女性の方が多かった）がいた。人の話をスポンジが水を吸うようにそのまま吸収して、新たな形で語り出すのは新鮮だったし、優秀な編集者が木の中の仏を見るようにエッセンスを掘り出していくのには感心させられた。ただし、TV の編集は事前に確認できないうえ、どうにでも編集可能なので要注意だ。

そして、新聞の連載。94 年 3 月～95 年 9

月にかけて読売に連載したリレーエッセイ「女から吹く風」(全8回)や、97年7月～10月の「子育て最前線」(全17回)など。中村(正)さんを最初に知ったのは、このコーナーでご一緒したことからのだったような気がする。その他、ちょっとした雑誌や公的機関のニュースなどにもエッセイを書く機会があった。赤ちゃんとママ社には、「お母さんのカウンセリングルーム」(『赤ちゃんとママ1・2・3歳』、1998年～2000年)、「ママのホットステーション」(『赤ちゃんとママ』2000年～2004年)と、長年にわたって毎月書いていた。これらは、伝えたいことを一般の人にわかりやすく語る訓練になったと思うし、コンパクトなので、印刷して配ると、講座の資料に使えた。

時々、カウンセリングの情報が女性雑誌に紹介されることもあったが、女性雑誌を見てカウンセリングに来るケースは、あまりカウンセリングに向かない層で、継続しない傾向があった。もちろん、継続するばかりが能でなく、シングルセッションで十分に有効な援助は可能だが、要するに手応えが感じられない層という意味である。他方、著書等を読んで訪れる層は、内容的にフィットするため、カウンセリングにつながりやすい。もっとも、最近ではネット検索で訪れる層が急増し、そもそも間口が広がっているのので、一概に言えないかもしれない。

母娘に関しては、今なおコンスタントに女性週刊誌から取材の依頼があるように思うが、今は引きうけておらず、2000年代に入ると、幼児から小学生をターゲットとし、男性をも巻き込んだ子育て雑誌が登場し、

執筆や取材の依頼も増えたが、他のスタッフに回すようにしている。今さら私が言うべきことはないような気がするし、これらがどのような効果をもたらしているのか、手応えを感じたことがないのだ。それから、ポップサイコロジーのジャンルに入るようなテーマの雑誌やTVの依頼。時間に余裕があった頃は、ちょっと面白くて、気が向いたら引きうけていたこともあるが、今はやめた。一貫して断ってきたのは、その場限りの事件のコメント(事件の背後にあるテーマを追った特集は別)。これはまったく無意味だし、無責任だと思う。思い入れのあるテーマを追ったものであっても、担当者が勉強していない場合も断る。なぜ、いちいち時間を割いて初歩的なことをレクチャーしなければならないのか腹が立つてくるからだ。

そんなわけで、最近ではマスコミとのつき合いはめっきり減った。時代の変化もある。かつては、もっとも手堅いクチコミを除けば、マスコミがある意味で社会につながる窓口であったものが、これだけ情報が大衆化されると、必ずしもマスコミを介さなくても情報発信は十分に可能になった。2002年以降は、研究所のホームページを充実させて、さまざまな角度から情報発信している。ネット上に立ちあがる世界は、意外なことに関係者のコミュニティを形成する。ごく小さな例外を除いて、一方的な情報発信が中心であるが、ここに人が集ってくる。ネットを通じて私たちのことを知ってアクセスしてくれる人々もいれば、しばらくそこでじっと観察を続け、少しずつ接近してくる人々もいる。カウンセリングを

終了した人々が、私たちが相変わらず存在していることを確認しては、安心の基盤としている場合もある。講師活動で全国に赴くが、エッセイやブログを通じて、つながり続けている人々もいる。最近では、ツイッターやフェイスブックが主流になりつつあるが、個人的には、今のところ、これ以上、手を出さないことにしている。

マスコミに入るかどうか分からないが、このところまったくできなくなってしまったのが自分自身の本を書くこと。書きたいことはいろいろあるが、今の生活をしている限り、どう考えても無理だ。やりたいのにできないとっているとストレスなので、潔くあきらめて、また、その時が来たらと考えることにした。いずれにしても、もう十年一生懸命働いたら、半分引退して自分のことをしようと考えている。そこから十年は、せつせと書くのだ。マスコミとのつきあいは、情報をめぐる時代の変化と自分のライフスタイルによって選択していかざるを得ない。拒否するでなく、振り回されるでなく、賢明におつきあいしていきたいものである。